橘 玲 著「知的幸福の技術―自由な人生のための 40 の物 語―」幻冬舎文庫 2009 年 10 月 10 日刊を読む

幸福の法則

１．美しい嘘と残酷な真実、どっちが好きですか？

（1）運動会の種目から徒競走を外した小学校がある。一等からビリまで足の速さに序列をつけるのは不平等だからだと言う。ゴールの直前で立ち止まり、最後はみんなで手をつないでテープを切る学校もある。

（2）人間は平等だという美しい虚構を信じることで近代社会は成立している。民主制を支持する以上、私たちはこの虚構を受け入れなければならない。納税額によって一票の価値に差をつければ、近代以前の階級社会に逆戻りしてしまうだろう。だが、美しさも限度を超えると醜悪になる。

（3）資本主義は反民主的な制度だ。民主制は一人一票だが資本主義のルールは一株一票であり、金持ちは市場から株式を買い集め会社の支配権を握ることができる。一株の価値は平等だが、株主の価値は持ち株数によって序列化される。

（4）株式会社では株主が会社を支配する建前になっているが、ほとんどの個人投資家には関係ない。株主総会に出席して反対意見を述べることはできるが、結論は発行株式数の 5 割超を保有する大株主の意向で決まり、少数意見が尊重されることはない。

（5）零細株主の権利の蹂躙が許されるのは、株式が利益の請求権に過ぎないからだ。株主の提案が拒絶されても人格や人間性が否定されるわけではない。すべての株主に平等の権利を認めれば、株式会社は統治能力を失って迷走するだけだろう。

（6）資本主義経済では、あらゆる市場参加者がたった一つの目標に向かって行動する。弱者救済や世界平和実現のために株式投資をする人はいない。人生の複雑さに比べれば、ゲームのルールはとても単純だ。

（7）起業家は株主から有限責任で出資を募り、自らの事業に資本を投入する。やがてそこからキャッシュが吐き出され、それを経営者、従業員、株主で分配する。会社の価値は投入した資本からどれだけのキャッシュが産出されたかで決まる。

（8）株式とは配当が業績に連動する債券のようなものだから、将来の利益がわかれば株価はほぼ自動的に確定する。だが投資家は事業というブラックボックスの中身を正確に知ることはできず、不確実な未来を占い、予想に金を投じるしかない。

（9）資本主義では、手法を問わず、法の許す範囲内でより多くの金を稼いだ者がゲームの勝者になる。結果は貨幣の増減で表わされ、敗者は退場を言い渡される。

(10) すべてを金銭に還元して評価し、序列化する資本主義には一片の偽善もない。だが正しさも限度を超えると耐えがたくなる。

(11) 夢だけを見て生きていくわけにはいかない。真実だけを突きつけられる世界は息苦しい。社会を支える相反する二つのルールと上手に折り合いをつけるところに、人生の知恵は生まれるのだろう。

２．いつの日かその扉を開けてみたい

（１）人は誰も幸福に生きたいと願う。だが幸福を定義するのは思いのほか難しい。

（２）ギリシアの哲人**プラトン**の答えは簡潔で美しい。彼にとって**幸福とは、イデアの世界に秘められた「真善美」を体験すること**だった。人生は至高の存在と出会うための長い旅だ。

（３）現在でも、カルト宗教からエコロジーまで、世俗の文明を拒絶し超越的な価値を求める人々の列は続いている。私はそうした試みを否定する者ではないが、その列の最後尾に並ぼうとは思わない。私の貧弱な知性ではそれが真実か迷妄かを判別できないからだ。

（４）18 世紀末のイギリス人**ベンサム**は「**幸福とは快楽の充足であり、社会全体の快楽の増大がすなわち善である**」と考えた。神なき時代に幸福を定義しようとすれば功利主義に拠って立つほかない。人間が神の玉座を占める社会では、法に従う限り、欲望を満たすあらゆる行為が許されている。

（５）もっともベンサムは自分勝手な行動を勧めたわけではない。**人は一人では生きていけない。自分が幸福に生きるためには共に暮らす人たちにも幸福でいてほしい**。夢見る現実主義者ベンサムは、**功利主義が共同体への献身につながる**ことを期待していた。

（６）幸福のかたちに諸説あっても、**「自由」が幸福の条件である**ことに異論のある人はいないだろう。奴隷が幸福になれないのは自由を奪われているからだ。**私たちは自分自身の支配者であり、誰もその権利を侵すことはできない**。

（７）ヒトは一匹の動物として生まれ、成長し、老い、死んでいく。この世に生を受ける前に親や社会を選ぶことはできない。ほとんどの日本人は、莫大な財政赤字を抱え、少子高齢化に苦しむこの国とともに 21 世紀初頭を生きていくことになるだろう。そう考えれば、人生の大半は運命と呼ぶほかないものによって、あらかじめ決められている。だからこそ私たちは、残されたわずかな自由を大切に生きるのだ。

（８）私はこれまで繰り返し同じことを述べてきた。

（９）**人生を経済的側面から語るなら、その目的は何ものにも依存せずに自分と家族の生活を守ることのできる経済的独立を達成することにある**。

⑽ **自由とは人生に複数の選択肢を持つことだ**。国家であれ会社であれ、経済的に第三者に依存し、そこにしがみつくしか生きる術がないのなら、新たな一歩は永遠に踏み出せないだろう。

⑾ 自由に生きるために一定量の貨幣が必要なら、与えられた資源を有効活用し、最短距離で目標に到達することで人生はより豊かになるはずだ。経済合理的に行動すべき理由がここにある――。

⑿ **自由や富が幸福な人生を約束するわけではない。それは未知の世界を旅する通行証のようなものではないだろうか**。

いつの日かその扉を開けてみたいと、私はずっと夢見てきた。

P140 ～ 142

＜コメント＞

橘玲（たちばなあきら）氏の資本主義論、自由論。資本主義とは何か、自由とは何か、人生とは何かを考えるヒントが満載のエッセイ集。是非、御一読を。

― 2016 年 8 月 4 日（木）　林　明夫記―